

宗学院公開講座（二〇一九年度）

密教浄土教と阿弥陀如来像

大正大学名誉教授 苦米地 誠 一

苦米地でございます。私は真言宗の所属でございます、その点から、真言密教について勉強させていただいております。今回は「密教浄土教と阿弥陀如来像」ということで、資料を用意させていただきました。なかなか大部のものになっておまして、これでも『平安期真言密教の研究』という本の中で、この問題を述べまして、それを少し短くとか要約した内容でございます。1時間半という時間では、この全てをお話しすることはなかなか難しいかと思えます。お話しできなかった点については、この資料をお帰りになった後でお読みいただければと思います。時間内にできるだけの話はさせていただこうかと思っております。

基本的に申しまして、平安時代の密教浄土教の問題については、この資料の初めの方に書いております。これまでに教科書に語られてきた日本史の中での浄土教の問題が、密教を勉強している立場からすると、どうも少し違うのではないかと、というところが研究の出発点でした。そのあたりから少しお話しさせていただこうかと思っております。

初めに「密教浄土教」と申しておりますが、その前に「浄土教」という言葉であります。普通に浄土教と言いま

すと、阿弥陀如来の極楽浄土への往生を願う信仰と、そのまま捉えられようかと思えます。ただ、実際に平安時代の浄土教というよりは、往生信仰ということで見ますと、極楽往生だけではなく、弥勒菩薩の兜率天への往生を願う信仰も大変大きな勢力を持っています。あるいは、少し時代が下がってまいりますと、熊野の補陀落渡海などで知られるような、観音浄土への往生といったことも見えてまいります。そういったさまざまなところへの往生というものを願う信仰があります。



あるいはさらに、顕教の浄土教というものが浄土教だと言われてきた背景には、鎌倉時代に始まる浄土宗、あるいは専修念仏の浄土門というものが後々非常に大きな勢力を持つようになってくるようになって来ました。言ってみれば平安時代の浄土教信仰というものを専修念仏の前史、前の歴史としてしか評価しないところから、割合と否定的なものとして捉えられた。あるいは、専修念仏に直接つながる信仰、源信の『往生要集』流の浄土教というものが中心であるという言い方がされてまいりました。

ただ、実際に見てみますと、資料にも挙げてございます。これは室町時代まで時代が下がりますが『溪風拾葉集』という天台宗において編纂をされました百科全書的なものがあります。その中の比叡山の念仏に4種類あります。1つには、秘密念仏、2つ目に、天台宗の念仏。3つ目が、通大乘の念仏、4つ目に、善導流の念仏。この4つが区別をされて示されております。秘密念仏というのは、これはまさに天台宗の念仏、往生信仰です。天台宗といっ

ても、日本の天台宗は中国の天台宗と違いまして密教を一緒にやっております。これを台密と申します。それに対して、空海門流、真言宗の密教が東密です。これは、京都に東寺さんがございますが、東寺の密教ということで東密と申します。真言宗東密に対して天台宗の密教を台密と申します。その台密の往生信仰というのがここである密教の秘密念仏です。それに対して、天台宗の念仏は『摩訶止観』に書かれる常行三昧です。

常行三昧と申しますと、源為憲の『三宝絵詞』というものに、山の念仏が比叡山の念仏の基になっているという話書かれております。その説明に『摩訶止観』の常行三昧であるとなっているのですけれども、実際に『摩訶止観』に書かれているものは、「阿・弥・陀」という3文字に「空」「仮」「中」という三諦を観ずる空観あるいは中観と申しますが、観想の実践をするときに、阿弥陀様をお祀りして、その周りをぐるぐる歩きながら観想をする。そういう観想が常行三昧です。撰闕・院政期、天台座主となった慈慧大師良源の下で天台宗教学の復興が行われたわけですけれども、そのころに編纂をされました幾つかの天台宗の常行三昧に関する著作を見ても、その内容は空観の常行三昧であって、決して往生を願うものにはなっておりません。

それに対して通大乘の念仏というのが、これが源信流、『往生要集』流の念仏だとされています。『往生要集』では、さまざまな經典論書から極楽往生に関わる要文を集めて、それを編纂した。その中では、まさに極楽浄土へ順次往生することが願われています。極楽往生を願うための実践として書かれたのが『往生要集』になろうかと思えます。そこでは、決して空観の観想することが目的ではなく、往生することが目的になっている。そこに天台の念仏と通大乘の念仏の違いがある。さらに、善導流の念仏という形で、まさに法然上人が善導を祖師としました善導流の念仏、専修念仏がさらに区分けをされていた。そういうところを見ましても、いわゆる比叡山の浄土教、天台の浄土教といってひとくくりにしてしまうわけにはいかない内容の違いというのが、そもそも本来あったと

ということです。

そういう中で浄土教は、私はここで阿弥陀の極楽浄土往生以外のものを含めて、全部、浄土教と称するにあたって、なぜそれを同じ浄土教ということができるとかというふうにかえるときに、浄土教の「教」という字は、そもそも明治時代に宗教という訳語が英語からつくられました。そのときの宗教という意味での「教」が当てられた。そういう意味で考えれば、別に、浄土門の教えに限定する必要はないわけです。そういう意味での往生信仰は、さまざまな教えをひっくるめて浄土教と言っているのではないかと。実際に、浄土教という言葉が歴史学などで使われてきたときに、何を指して言われているかというところ、藤原時代の浄土教です。藤原時代の浄土教は、阿弥陀の極楽浄土往生だけではありません。先ほども申しました、弥勒の浄土、あるいは観音浄土なども含む、さまざまな浄土への往生が願われているし、さらに言えば、兜率天へ往生をしたい、あるいは直接兜率天へ往生する代わりにいったん極楽へ往生をして、兜率天から56億7000万年の後に弥勒菩薩が地上に下生して下りてくる。そして、悟りを開いて弥勒仏という仏様になる。そうすると弥勒仏は、この世で竜華樹の下で3回の説法をする、竜華三会と申します。そのときに『法華経』が説かれて、そのときにその場に集まっていた者たち全てに、未来の成仏の授記が与えられる。弥勒菩薩の竜華三会に出会いたいという望みを持って、それまでの期間を極楽へ往生して、極楽でその時期を待とうという信仰がみられます。

こういつたものについて、歴史学では極楽と兜率天、弥勒菩薩と阿弥陀如来の区別のつかない未熟な信仰という言葉が使われておりましたけれども、そうではない。それははっきりと両方のことを知って、分かっている、そういう信仰を持っていたのだらうと。代表は何かと申しますと、藤原道長です。金峯山寺の埋経の経筒にその願文が刻まれております。そこには浄土三部経、阿弥陀三部経だけではなく、弥勒菩薩に関する経、あるいは密教の經典

なども一緒に書写をされ、納められて、そして極楽へ往生し、そこから弥勒下生のときに、その会座に知遇しようということが述べられています。そういったところから見て、そういう信仰が平安時代に大きな勢力を持っていたと考えられます。そういった信仰のもとに、『法華経』の信仰というものが大きな力を持っていたことが考えられます。

『法華経』という経典そのものに極楽往生が説かれ、兜率天の往生が説かれ、あるいは十方浄土への往生なども説かれています。さらには、密教の立場から申しますと、弘法大師空海は、『法華経』という経典を、阿弥陀如来と観自在菩薩の経典である、三摩地法門・法曼荼羅（仏の覚りの境地そのものであり、文字によって表された曼荼羅である）と解釈をしております。これは『理趣経』の註釈書ではそのような解釈をするわけですが、それによって『法華経』と阿弥陀如来と観自在菩薩の二尊一経は同体である。同体の存在が、お経としては『法華経』として現れて、浄土においては阿弥陀如来として現れ、現世においては観自在菩薩として現れる。この3つは一体の存在であるという信仰が語られるようになっていった。そういった中で、『法華経』に基づく浄土教信仰というものが顕教の信仰というだけではなく、密教の信仰の中にも幅広く広がっています。

資料の2ページ目に、その概念図を概略で載せております。平安時代の浄土教信仰全体、右側に密教の浄土教、左側に顕教の浄土教、その両側にまたがって『法華経』信仰の浄土教というものが存在していました。実は、この『法華経』信仰の浄土教の中に含まれる部分が、平安時代の浄土信仰の大半であろうと思っております。そこには極楽もあれば、兜率もある。あるいは観音の浄土もある、文殊の浄土もある。弥勒の浄土はもちろんある。そういった中に、さらにそれ以外のさまざまな要素、密教経典の中における、特に観音の密教経典の中には観音の真言の力によって極楽へ往生しようということが説かれているものがたくさんあります。『不空罽索神変真言経』ですと

かに極楽往生が説かれております。あるいは、尊勝陀羅尼であるとか、陀羅尼の類においても、そういったことが説かれております。あるいは、真言宗の一番中心である『大日経』の註釈書に『大日経疏』というものがございませう。そこには「三品悉地」というものを求める修行があつて、それは、1つには上品は密厳浄土への往生。この密厳浄土というのは何かと言へば、これは大日如來の浄土。真言宗の一番の中心は大日如來ですが、その大日如來の浄土への往生。あるいは、中品は十方浄土への往生。下品は阿修羅窟などで入定することが、持明悉地と言つて、真言陀羅尼を伝受し、受持することによつて得られる成就として説かれている。この下品の阿修羅窟への往生ですけれども、これは弘法大師空海の入定信仰とも関わってきます。

その前に、インドにおいて、お釈迦様の十大弟子の一番弟子である迦葉尊者が、入滅をしないで鷄足山という洞窟の中に入定して、弥勒菩薩の下生を待つてゐることが、阿含の經典を含めて幾つかの經典、あるいは律などで説かれております。弘法大師の入定信仰というのも、それから展開したものと考えられ、生身の入定という形で、弘法大師空海も高野山で入定しております。歴史的に見れば、すでに入滅して茶毘に付されているわけですから、弘法大師の入定信仰という形でその信仰が語られてくる。その先蹤として迦葉尊者の入定というものはあるわけです。入定信仰というものは、結局、将来の弥勒菩薩の下生を待つ信仰ということですから、そこには兜率往生ではないけれども、極楽往生と結び付いて弥勒菩薩の下生を待つ者につながる信仰というものはある。そういったさまざまなものがある。この平安時代の浄土往生信仰というものができあがつていった。

ただ、一つ言えることは、こういうさまざまな教学的な問題については、教学を勉強し、修行していた僧侶の間でははつきりとした認識があつたと思ひます。あるいは、男性の貴族たち、知識階級の貴族たちの間には理解があつたかと思うのですが、必ずしも一般の人々、あるいは女性の人々にまでそういった知識が行き渡つていったか

いうと、必ずしもそうでもない。これは一例でございますけれども『成尋阿闍梨母集』という成尋阿闍梨のお母様の和歌を集めたものがございます。三井寺園城寺（天台宗寺門派）の成尋の伝記では、入宋をして中国で靈験を示したことが語られております。この人の弟が成尊という仁和寺のお坊さんでございます。兄弟そろって密教の修行者でございますが、このお母さんが書いたものを集めた『成尋阿闍梨母集』の中では、このお母さんは、どうも密教とか顕教とか区別がつかないようなレベルでの、ただ、浄土へ往生したい、極楽へ往生したいという素朴な信仰のままでございます。

ですから、必ずしも密教の浄土教、顕教の浄土教だと言うのは、言ってみれば、僧侶の間の、あるいは知識階級の問題であって、一般での問題ではないかもしれません。ただ、そうであったとしても、これからお話しする仏像の問題などに関しては、そういったことが一通り問題になってくるのではないかと、背景として問題になってくるのではないかと思います。

密教の浄土教の話をしておりますと時間がなくなってしまうので、このあたりで阿弥陀如来像、仏像の話に移りたいと思います。阿弥陀如来像と申しましても、これは、もちろん、最澄、空海による密教の将来以前から、すでに造像されております。有名なのは、橘夫人の造像でございます。そういった古い時代の阿弥陀如来像というのは転法輪印という印相で表されることが多い仏像でございました。

お釈迦様の印、釈迦像の印には大きく分けて、転法輪印と禅定印と触地印、この三つの印がございます。触地印というのは「触れる地の印」と書きます。触地印というのは、座った形で右手を伸ばして、指先で大地を触れる形です。これは何かというと、お釈迦様が悟りを開かれたときに、天魔がその悟りを妨げます。その天魔を降伏するために、お釈迦様は大地に触れて、その大地の神、地神を揺り起こして、その地神の力で天魔を降伏し、悟りを開か

れたという話が伝えられております。そういうことから、触地印というのは、悟りを開いたその瞬間の姿を現した形と言われております。

もう一つ、禅定印というのがございます。これは、禅宗のお坊さんが両手を重ねて座っている、あの形でございます。普通には、左手を平らにして右手を上に乗ねる形です。これを禅定印と申します。これは、瑜伽行、瞑想に入っている状態を示す。そして、転法輪印というのは、転法輪、法輪を転じる、法輪を転がすという、お説法するというところでございますので、お釈迦様が説法している姿が転法輪印とされます。

釈迦如来が大半でございませけれども、如来像一般の3種の印の中で、転法輪印というのは左右非対称の印として作られる、造像されることが多い。資料の3ページに、これは当麻曼陀羅の中央を拡大して載せてございますが、これが左右非対称の転法輪印の像になっております。ちょっと見にくくなっておりますが、これは3種類ございまして、親指と人差し指を付ける形、中指を付ける形、薬指を付ける形の三つあります。この形を、左手の甲を外にして、右手をこういう形（両掌を向かい合わせにして、両手の親指と人差し指などを付けた四指の先を付ける形）でするのが、左右非対称の転法輪印でございませ。これが如来像一般の転法輪印でございませ。古い時代は、ほぼ左右非対称の転法輪印で像造されます。もう一つ、転法輪印あるいは説法印と言われるものに、右手を施無畏印にし、左手を与願印にするものがございます。施無畏印というのは、胸側に手のひらを外に向けて上げていて、これが施無畏印。「畏れないこと（状態）」を施すことで、施無畏印と申します。左手を下げ、手のひらを外に向けてるのが与願印。願いを与える、願いを叶えるという意味でございませ。両手で施無畏印と与願印をしたときに、これが説法印と呼ばれます。これは、阿弥陀如来の来迎印の形になったと考えられるのですけれども、それについては、また後で時間がありましたらお話しさせていただきます。

このような阿弥陀如来の印相というものが古い時代にはございました。ところが、それとは別に、現在というか江戸時代以降になりますと、九品往生の印というものが説かれてまいります。これは、阿弥陀の禪定印と阿弥陀の転法輪印、阿弥陀の来迎印という三つの印が、親指と人差し指をつなげる形、中指をつなげる形、薬指をつなげる形、その組み合わせによって9種類になる。それを九品往生に当てはめた印ということで、江戸時代に『仏像図彙』という、これは木版で出版された図像集でございますけれども、その中に出てまいります。『仏像図彙』に基づく九品往生の意味に対して、それを実際に彫刻でつくったと考えられているのが、東京の九品仏浄真寺の九体阿弥陀像でございます。これは組み合わせ方が『仏像図彙』と少しずれております。

取りあえず『仏像図彙』でいきますと、絵が小さくて見づらくもありませんけれども、阿弥陀の定印と言われる両手を重ねて、人差し指の先を曲げて上に親指を載せる定印、これが上品上生。これをそのまま胸側に持つてきて、両手の平を外に向けて開くと、上品中生。これをさらに開いて、この形（施無畏印と与願印）にすると上品下生になる。親指と中指になると中品、親指と薬指だと下品という形になるというのが、この『仏像図彙』の説明でございます。これが浄真寺になると、定印のままで人差し指が上生、中指が中生、薬指が下生というふううに、組み合わせがちよとずれております。そういう組み合わせで説明をされるのがある。ただ、それについては、江戸時代になってそういう組み合わせができたので、それ以前にはなかったことがすでに指摘をされております。では、それ以前はどうだったのかというのが、これからのお話でございます。

阿弥陀如来の印相というものは、顕教の經典の中では一切書かれておりません。書かれていないので、転法輪印というものが印相として使われてきました。密教の經典の中では阿弥陀如来像の印相としてではなく、行者、修行者が実際に修行するときに結ぶ印相として、阿弥陀の禪定印というものが説かれ始めます。力端定印とか、妙觀察

智定印という名前が付けられております。ちなみに、禪定印というのは、普通の禪定印は左手を広げてその上に右手を重ねます。これが、その禪定印です。ただ、阿弥陀の禪定印は、金剛界の法界定印というものを基にしております。金剛界の法界定印というのは、左右の手を合わせて結びます。これを金剛縛と申します。それを開きます。これが金剛界の法界定印という定印になります。さらに人差し指の先を曲げてその上に親指を載せると、これが阿弥陀の定印になります。ですから、中指、薬指、小指が交差した状態になるのが、この阿弥陀の定印であります。そういうところがあるのですけれども、そういった印は修行者が修行の中で観相をする、瑜伽行をするときの印相として説かれてまいりました。それが『金剛頂經』という系統の密教經典の中から出てきた印相ですけれども、それが『胎藏旧図様』という『大日經』系の曼荼羅の図像を経て、阿弥陀如来の印相として描かれるようになっていきます。金剛界の中で阿弥陀如来の印相として説かれてきます。ただ、『金剛頂經』という經典では、定印としてしか出ておりませんので、現図（現に図繪された曼荼羅という意味で、空海が将来した曼荼羅）の金剛界曼荼羅では法界定印になっていて、阿弥陀の定印にはなっていない。阿弥陀の定印の阿弥陀如来像というのは、必ずしも当初からあつた阿弥陀如来のお姿ではない。実際、チベットにおいてつくられている阿弥陀如来像は阿弥陀の定印ではございません。普通の法界定印の上に、多くの場合は鉄鉢を持っております。そういうのがチベット密教、あるいはチベット仏教の中でつくられた阿弥陀如来のお姿になっております。ですから、阿弥陀の定印の阿弥陀如来というのは、中国から日本に来て、日本で大きく花開いた仏像になります。

そういう阿弥陀如来の定印ですけれども、詳しいことは後でお読みいただくことにして、最初は曼荼羅の中で、特に「現図胎藏曼荼羅」あるいは金剛界でも「八十一尊曼荼羅」と呼ばれる金剛界の阿弥陀如来の像が、阿弥陀の定印像でございました。仏像として一番早くつくられていると考えられるのが、安祥寺の五智如来像というもので

ございます。安祥寺というお寺は、今はもうなくなっておりますけれども、五智如来像は、今、京都国立博物館に寄託をされていて、多分、見ることができると思えます。大日如来という密教の中心の仏様の回りに、東に阿闍如来、南に宝生如来、西に阿弥陀如来、北に不空成就如来という五体の仏様。その中の西方の阿弥陀如来が、阿弥陀の定印の阿弥陀如来像としては、最古かどうかは、ちょっとはつきりしないところがあるのですけれども、現存する像としては一番古いお像になっております。

ただ、もう一つ、仁和寺の阿弥陀如来像というのがございます。宇多天皇が退位されて寛平法皇という法皇様になられました。仁和寺というお寺は、その寛平法皇が建立されたお寺です。ただ、もともとは父天皇であつた光孝天皇の菩提のために、光孝天皇の陵の中につくつたお寺ということで、最初は光孝天皇の親戚関係、親族ということもありますし、あるいは光孝天皇ご自身の信仰ということもあつたかと思うのですが、延暦寺のお坊さん、幽仙という人が別当になつたお寺でございます。その次に寛平法皇がご出家になられて、仁和寺の中にお住いをつくられた。そのお住いを御室と申します。今は御室仁和寺と申しますが、法皇様のお住いのことを御室と申します。そこに最初に祀られたのが、阿弥陀三尊像でございました。両側に観音菩薩、勢至菩薩を脇侍にした阿弥陀三尊ですけれども、それが定印の阿弥陀如来像であります。安祥寺の五智如来像と仁和寺の阿弥陀如来像と、どちらが早いのか。実際には造立年代、文献上の問題で、いつになるのかによつて、どちらが早いか微妙なところです。どちらにしても、定印の阿弥陀如来像としては一番古いものである。おそらく寛平法皇のご信仰の中で阿弥陀如来像が造立されたと考えられます。寛平法皇はご出家されたときに、真言宗のお坊さんとして出家をされている。密教の阿闍梨として弟子を養成する。密教の非常に専門的な修行をされた法皇様である。そういった方につくられた阿弥陀如来像というのは、この曼荼羅から抽出された定印の阿弥陀如来像であつたと考えられます。そういったものが、

一番古い時代の定印の阿弥陀如来像でございます。いわゆる定印の阿弥陀如来像ということ、それらは密教の中からでないとして出てこない仏像である。しかも、それは密教寺院の中でつくられてきた阿弥陀如来像である。

できるだけたくさんのお話をしたいと思いますので、飛ばし飛ばしまいります。細かいところは後でご覧いただければと思います。そういった中に、そのお像が外側の姿、要するに印相、手の形だけで密教像というのではなく、もつとはつきり、具体的に密教の像であることを示す証拠が残されている。それが、胎内墨書というものです。要するに、仏像というのは一木造で、中が全部1つの木だというお像もありますけれども、中に内割りといって空洞を作る。寄せ木づくりのようなものと、部分、部分を分けてつくって、それを後に組み合わせるようなものもございます。そうすると、中に内割りという空洞ができる。空洞部分の内側に墨書、墨でさまざまな字を書いている。その中に梵字、古代のインドの文字でございますけれども、それによって阿弥陀如来や、あるいは大日如来、あるいは種子と申しまして、一字の梵字で尊格を表すもの、あるいは真言陀羅尼といったようなものを書くものが現れてまいります。

ここで取り上げているのが、最初に取り上げたのが、墨書が確認されている中では一番古いのが、資料の8ページの最初に挙げてあります、真言律宗岩船寺の阿弥陀如来像です。ただ、岩船寺は割合古いお寺なのですが、この岩船寺さんも真言密教系統のお寺として、この阿弥陀如来像をつくっている。頭の内割の中に、阿(ア)字ですとか、訖哩(キリク)字という文字が梵字で書かれております。このキリク字というのは、サンスクリットのフリーヒ(Hrih)という文字です。これは、阿弥陀如来の種子である。種子というのは1字でもって、その尊格を示しますから、このキリク字が書かれているということは、それが阿弥陀如来であるという意味になります。あるいは阿字。阿字というのは、普通に言えば、胎藏界の大日如来の種子でございます。なので、阿字とキリク字と、大日

如来と阿弥陀如来と、両方の種子がその胎内に墨書されている。そういったようなものになっております。

そういう墨書銘を持つ仏像というのは、その後、多く出来ております。これは、時代が下がって鎌倉時代、あるいは室町時代に至るまで、胎内にそういう、特に真言を、あるいは種子を墨書する例というのは、実際にずっと作られています。これは、阿弥陀如来像だけの話ではなく、さまざまな仏像の中に、そういう墨書はされるわけです。もちろんその中には結縁者の名前であるとか、あるいは仏師の名前などが書かれたものがある。

あるいは、さらに胎内納入品と申しまして、その内割の中に、仏像の本体の内側に墨書するのではなくて、紙や布に書いたものを納めるといったようなものもあります。そういった胎内に納めたものに陀羅尼真言が書かれる、梵字が書かれる、そういったものもございます。

そういった中で一番有名なのは何かと申しますと、平等院鳳凰堂の阿弥陀如来像です。平等院鳳凰堂の阿弥陀如来像、これは昭和の解体修理でしたか、明治の解体修理でしたか、ちょっと忘れましたが（昭和二十五年の修理）、胎内から、資料の9ページに載せてございます、この木製の梵字墨書の蓮台というものが見つかっております。それだけ見ると、仏様が上に乗る蓮華座のようですね、実はこの上に阿弥陀如来の陀羅尼が墨書されております。それが、阿弥陀如来の仏像の胸の内割の中に納められている。これについては早い時代から、これは真言念誦、真言密教の修行の中で観想される、入我我入観の具体的なものを、その形で示したものだと言指されてきました。入我我入観というのは、真言密教の修行の中で、実は、行者さんが真言を唱えながら観想をするわけですけども、自分の唱えた真言が自分の口から出て、それが本尊さんのお腹から入って行って、その本尊さんの胸の中で、真言の文字が右にぐるりと回ってつながら。そういう観想をする。今度はその本尊さん、仏さんの御口からその真言の文字が出てきて、それが自分の頭の上から入って、自分の胸の中でやはり右に回って、ぐるりと丸く回ってつ

ながる。そういう観想をしなさい。それによって、本尊と自分が一体になる。そういう観想になります。そういうのを入我入観と申します。そういう観想を、まさにその具体的なものを示したのが、この鳳凰堂の阿弥陀如来の梵字蓮台だという指摘は、鳳凰堂の阿弥陀如来の解体修理で出てきたときから、指摘されてきたことではございます。

さらに平等院鳳凰堂の像というのは、仏師定朝が作った有名な仏像でございます。その光背の頂上に、この写真は小さくて見えづらいのですが、阿弥陀如来の頭の上の方、光背の上の方に、実は大日如来の像が付いています。拡大しておけばよかったです。智拳印の大日如来というのは、金剛界の大日如来です。このような、金剛界曼荼羅の中心の大日如来が、この光背のところにくっついております。インターネットで検索して、よさそうなものを選んでここに載せてきただけです。あまりいい写真ではありませんので、少し見えづらいと思いますけれども、調べていただくと、光背の上部の方に智拳印の大日如来の像が付いているのが分かるかと思えます。

これは、阿弥陀如来というものが、その本体の大日如来と団体であるということを示している。真言密教では、先ほどの五仏、金剛界の五仏と申しました大日如来、阿閼如来、宝生如来、阿弥陀如来、不空成就如来という五仏というのは、実は大日如来の5つの智慧、五智を象徴する仏でもある。大日如来は法界体性智という一番根本の智慧。阿閼如来は大円鏡智という智慧。大きな丸い鏡のようなという名前の智慧です。宝生如来は平等性智という智慧。阿弥陀如来は妙観察智という智慧。不空成就如来は成所作智という智慧を象徴する仏であって、実は全て大日如来の5つ智慧の一部にはかならない。

ですから、阿弥陀如来は大日如来の妙観察智なのであって、大日如来と阿弥陀如来は本当は一体なのだという考え方が、一方にございます。そういった大日如来と一体の阿弥陀如来というものを示す造像として、こういう大日

如来の形を阿弥陀如来の像のどこかに付けるということが、行われていたと考えられます。

あとに載せてございますけれども、来迎印の阿弥陀如来として、禅林寺の見返り阿弥陀がございます。この見返り阿弥陀の光背の上にも、これは定印ですけれども、像が付いている。おそらくこの定印の化仏は胎藏界の大日であらうと考えております。もちろん宝冠をかぶっているというところで言うと、宝冠阿弥陀という別の、密教の阿弥陀如来で宝冠をかぶっている像もあるので、どちらとも言えないのですが、化仏として阿弥陀如来像の光背に付けるとすれば、やはり宝冠をかぶっている化仏は胎藏大日だと。細かいところがよく見えませんので断定はできないのですが、そういうふうを考えています。

あるいは、これはどこで見たのか記憶に残っておりませんが、幾つかのお寺を回っていたときに、大日如来像ではなくて多宝塔を載せている像もございました。多宝塔というのは、大日如来の三摩耶形と申しまして、先ほど梵字で示すのが種子と申しましたけれども、それ以外に、器物という言い方をしますけれども、さまざまな「モノ」でその尊格を示す方法がございます。

阿弥陀如来や観音菩薩ですと、蓮の花、蓮華でございますし、阿閼如来あるいは金剛薩埵という菩薩は、金剛杵というもの。文殊菩薩ですとお経ですとか、そういうものでもって示すものがございますが、大日如来の場合は、塔が大日如来を示す三摩耶形というものになっております。そういったものを上に載せた仏像もございました。そういうように、大日如来の姿を何らかの形で阿弥陀如来の造像の中に組み入れたものは、やはり大日・阿弥陀一体の姿を示した仏像であらうということが考えられます。

さらに平等院鳳凰堂は、堂内に極楽浄土の様相が描かれており、さらに長押のところには二十五菩薩の像のレリーフ状のものが付けられております。その二十五菩薩の像の幾つかには、金剛名号といって金剛何々という菩薩名

が付けられているものがあります。この金剛名号、金剛何々、例えば金剛法ですとか、金剛利、金剛語などさまざまな名前がございますが、これらは金剛界系の密教の尊格の名前ということになっています。

例えば金剛法菩薩。この金剛法というのは、観音様、観自在菩薩の金剛名号が金剛法菩薩になる。あるいは金剛利というのは文殊菩薩であるとされます。そういうように、金剛名号というものが密教の菩薩の名前としてございます。そういったものが、二十五菩薩の像の幾つかの中に墨書されているものが見つかっております。そのことは、長押に付けられた二十五菩薩も、実は密教の造像の一環であるということが考えられます。

さらに、平等院鳳凰堂内部の極楽浄土の荘厳なのですが、この阿弥陀如来像をつくった定朝という仏師に対して、天台密教の大家である皇慶という阿闍梨さんは、阿弥陀如来法の次第を伝授している。そういう記録が残っております。その皇慶さんが定朝さんに伝授した阿弥陀如来法の次第の翻刻というものが発表されております。昔、京博におられた伊東先生が発見されて、翻刻をされた資料です。その中では、道場観と申しまして、修法の中で、先ほど入我入観と言って、自分と本尊さんが一体となる観想があると申しましたけれども、その前に、目の前にいるご本尊に対して、本来その仏のいる世界というものを観想する、そういう観想がございます。これを道場観または曼荼羅観と申します。その道場観の中で、阿弥陀如来の世界、極楽浄土の様相を観想する。一般的には『無量寿如来念誦儀軌』という儀軌によって、その観想をするようになっていっているのですが、その『無量寿如来念誦儀軌』の観想の表現は簡単なものになっておりまして、「水、鳥、樹林、皆法音を演ぶ。」水や鳥や樹木や林が、皆、仏の説法をしている（教えを演説している）という様子を観想をなささいということなんです。もちろんその前もあります。それは、実は『観無量寿経』の極楽浄土の観想を前提として、それを省略したものだと考えられています。定朝が皇慶から伝授された次第ではもっと詳しく、『観無量寿経』の本文がもっと詳しく引用されて、極楽浄土の様相を観

想するようになっております。

なので、その次第によって極楽浄土の様相を堂内に再現すれば、『観無量寿経』のそのままの姿が描かれて当然になるわけです。そういうふうな平等院のつくられ方を見ていったときに、美術史の中で昔言われていたような、浄土教と密教とを後に融合させたとか、一方で浄土教があり、一方で密教があつて、それを融合させたのではなく、そもそも密教の中にある浄土教というもので、そういった仏像がつくられてきたということが理解されるのではないかと思います。

駆け足で申し訳ないのですが、そういったような話を、詳しいことはあとで見たいだけで、そういった定印の阿弥陀如来像というのが一般的に広くつくられていく中で、ここでもう一つ、触れるのを忘れておりましたけれども、そういった定朝様の阿弥陀如来像を含めて多くの阿弥陀如来像が、金剛界の阿弥陀如来と胎藏界の阿弥陀如来で、実は袈裟の付け方が違つております。金剛界の阿弥陀如来は偏袒右肩。右肩の袈裟を脱いでいる形。右肩を出している形の像が、金剛界の阿弥陀如来。胎藏界の阿弥陀如来は通肩といって、両肩に袈裟を掛けています。ちなみに申しますと、両肩に袈裟を掛けるというのは、インドにおいて袈裟の付け方としては正装になります。右肩を脱ぐというのは普段着みたいなものです。そういうことがあります。そういう袈裟の付け方の違いがあります。多くの場合は偏袒右肩の阿弥陀如来像が多いのですが、通肩の阿弥陀如来もある。

そういった中で、先ほどの話になりますけれども、常行三昧堂の阿弥陀如来は通肩の阿弥陀如来になつていたということもあります。(これは宝冠を戴いて袈裟を付け、阿弥陀の定印で、孔雀座に乗つた、金剛界八十一尊曼荼羅の特殊な阿弥陀像です) 必ずしも通肩と偏袒右肩の両様がつくられているのではないのですが、(他にも紅顔梨色阿弥陀と呼ばれる宝冠の阿弥陀如来像もあります) そういう定印の阿弥陀如来像に對しまして、転法輪印の阿

弥陀如来像について、少し様子をみてまいりたいと思います。

転法輪印の阿弥陀如来像は、先ほども申しましたように、転法輪印とは、仏が説法をする姿ということですが、一般的なものには左右非対称の転法輪印。左右非対称とは、左手は内を向いて、右手は外を向いている形になります。付けた指の先同士をくっつけ合わせてこうなる（両手の親指と人差し指の先を付ける）。まあ、こうでも（両手の親指と中指の先を付ける）、こうでも（両手の親指と薬指の先を付ける）いいのですが。あるいはこうなったり、こうなったり（左手を下に、右手を上にして指先を付ける）、指の組み合わせは像ごとによっていろいろありますが、そういう左右非対称の転法輪印が一般的です。

しかし、密教の転法輪印として知られているのは、左右対称の転法輪印。左右対称というのは、先ほど少し申しましたように、右と左が同じ姿。要するに親指と人差し指の先を突き合わせて、それを両手とも外に向ける。（左の手を）付ける形と開く形とありますけれども、基本は付ける形で、これが、左右対称の転法輪印ということになります。

これについて代表的なものは、やはり禅林寺にあります。これは鎌倉時代の画像、絵像ですけれども、山越の阿弥陀如来像があります。資料の12ページの下の段に載せてあります。これが左右対称の転法輪印の阿弥陀如来像の代表です。その根拠となるのが、『陀羅尼集経』という密教の経典の中に出てくる阿弥陀如来の印相が示されております。

実は阿弥陀如来像のこの転法輪印について、「阿弥陀仏輪印第十三」というものですが、「左右の手、二大指を以て各々無名指の頭を捻じ、右、左を圧して心に当てる。若し説法論議の時、日日に此の法を作さば、一切歡喜し、死して阿弥陀仏国に生ず」（『大正藏』18、802b）云々と。あるいは「序分第一」ですと、「次に画師の仏像を

画く法用。中央に阿弥陀仏を著す。結跏趺坐し、手は阿弥陀仏説法印を作す。左右の五指と無名指と、頭を各々相ひ捻し、右の五指・無名指の頭を以て左の五指・無名指の頭を押し、左右の頭指・中指・小指を開き豎つ。仏の右の廂には十一面觀世音菩薩の像を作し、左の廂には大勢至菩薩の像を作す。(中略) 其の仏の形は金色に作し、其の袈裟は赤色に作し、其の仏の円光は五色を以て成じ、其の仏の頭上には五色光を放つ」(『大正蔵』18、800c) という記述があります。

美術史の方では、これによって左右対称の転法輪印ができたのだという解釈がなされます。その根拠は、『覚禪抄』という、これは鎌倉時代につくられた真言密教の、真言宗のさまざまな図像であるとか修法であるとか、そういったものを集めたものの中に出てくる説明によって、そういうふうに言います。でも、この『陀羅尼集経』の説明そのものを見ますと、これはどういうことになるかというところ、最初の方は、「左右の手、二五指を以て各々無名指の頭を捻じ、右、左を押し心に当てる」。無名指というのは薬指のことです。なので、こういうふうになる。右をもって左を押し胸に当てるのですから、こういういわゆる普通の、如来像一般の転法輪印です。

あるいはその下ですと、これも同じですね。あとの三つの指を開かせるというところか、立てなさいということが説明として加わっています。右をもって左を押しというところか、こういう形になりますから(左右非対称の転法輪印)、こうはなりません(左右対称の転法輪印)。普通ですとこうなります。平らにしてこうなることがありますけれども、普通でしたらこうなります。ですから、これは普通に考えれば、如来像一般の転法輪印を示すもので、決して左右対称の転法輪印の説明にはなっていないと思います。私はそう考えます。

それでは、左右対称の転法輪印の根拠は何になるのかというと、資料の12ページの上の方に、小さく白黒で図像を挙げてございます。安祥寺恵運という人が日本にもたらした、「唐本九品曼荼羅」というものがあります。これ

は九体の阿弥陀如来の像を描いたものなのですが、その中央の像が左右対称の転法輪印の像になっております。ただ、ここに出てくるのは、そのほかの8体は何かよく分からない像になっていて、そういう像の阿弥陀さんの仏像というのは、私も見たことがないのでよく分からないのですが、中央には左右対称の転法輪印の阿弥陀如来像が描かれている。

もう一つ、この左右対称の転法輪印の阿弥陀如来像の古いものとして、法隆寺にある阿弥陀如来像が、やはり古い左右対称の転法輪印像として造立されているのがある。これについては、その造立時期が、この恵運の帰朝、日本に帰ってきた時期の前後が微妙なところがありまして、美術史の方では恵運帰朝以前にこの像がつくられたことになっている。そうすると、恵運さんが持って帰った図像が基になったという説は、少し微妙な問題が生じてくるわけですが、恵運さんが持って帰ってくる前後には、そのほかにも入唐八家と言われる人、円行ですとか、まあ、宗叡や円珍はあとですが、円仁さんも帰っていて、そういうった人たちが持って帰ってきた可能性もあります。

あるいは、この法隆寺の阿弥陀如来像の造立自体が、実は恵運の帰朝以降である、私は、その方が可能性は高いと思っています。そういうものであれば、恵運の招来した図像によって、この左右対称の阿弥陀如来像がつくられ始めたのはいいか。そのときに、普通の左右対称の阿弥陀如来、恵運の図像もそうですが、やはり阿弥陀如来の定印の、親指と人さし指の先を付けたということが、一つ大きな要因となって、こういう左右対称の阿弥陀如来の転法輪印というものが生まれてきたのではないかと考えております。

実はこのことは資料的にどうもはつきりとしたことが分からないところがあって、断定的なことが言えないのですが、そういう可能性がある。しかも、時代が下がって、この禅林寺の山越阿弥陀如来は、さらに左肩の上が少し

切れておりますけれども、ここに梵字の阿字を描いた月輪があることをもって、これは密教像であるということ、早くから指摘されていたところであります。

一つ、この阿弥陀如来像は、転法輪印の人さし指と親指をくつつけた真ん中のところの糸がほつれていて、そこに五色の糸が結び付けられた跡がある。これはどういうことかと申しますと、臨終行儀。亡くなるときに極楽往生を願って、阿弥陀如来と結縁をする。そのために、仏像の手から五色の糸、あるいは五色の幡をつないで、それを亡くなる人が手に持って、往生を願って亡くなる。そういう臨終の行儀というものがございます。

そもそもの臨終行儀は、実は律の中に書かれていて、お釈迦様の説かれたところだとされているわけです。日本では、その律の註釈書である（唐の南山律師道宣の著した）『四分律行事鈔』というものが典拠と言われております。その前に、律そのものの中に、そもそもの仏の像を亡くなる人の西に置いて、その前で病者、病人が、その臨終の行儀を行うという律の規定があります。そこから始まった臨終行儀のための本尊としての、禅林寺の山越阿弥陀如来像がつけられたということです。

それと同時に、普通の来迎の阿弥陀如来像は、斜め向きに描かれることが多い。早来迎の像ですとか、そういう専修念仏系の来迎の阿弥陀如来像は、斜め方向から往生者のところに向かってくる。それを外側から眺める。そういう像が多いのです。正面向きに仏様を描くというのは、やはり観想のための本尊、そういう性格があるのだろうと思います。そういう意味で、やはりこの山越阿弥陀如来像は密教の像として考えることができるだろうということです。

もちろん禅林寺というお寺自体が、（本本は密教寺院でした。）禅林寺さんは今、浄土宗禅林寺派の本山になっております。その由緒に関しては、禅林寺の静遍が、法然さん、源空上人に帰依をして、その弟子の証空さんに譲っ

て、それから、浄土宗のお寺になったのだと伝えられております。けれども、実は禅林寺は鎌倉時代に下がって、鎌倉時代末になっても、真言宗のお坊さんがそこで実際に聖教の書写、写本の書写活動などもしておりますし、真言宗のお寺としての実績というものが確認できます。しかも、静遍さんが座主、住職になっていた時代であっても、禅林寺座主の補任権、任命権は御室、この当時ですと、北院御室（守覚法親王）が握っておりますので、静遍さんが勝手に誰かに譲るといふことはできないお寺でした。そういった意味から言っても、禅林寺はまだまだ鎌倉時代は真言宗のお寺であった。そういったところでつくられた山越阿弥陀、あるいは見返りの阿弥陀はやはり密教寺院の中でつくられた密教像と見るべきではないかということがあります。

そうしますと、転法輪印と共にもう一つ、発生の由来がよく分からないのが、この来迎印の阿弥陀如来像ということになります。何とか来迎印まで終わりにして、密教と阿弥陀如来像の話をやっとさせていただけるかと思いません。

この来迎印の阿弥陀如来像というのは、一般的には迎講の本尊とされます。迎講というのは、阿弥陀如来が往生者のところに迎えにやってくる、そのさまをドラマ形式で見る、舞台形式で見る。実際に現実の上で、阿弥陀如来と二十五菩薩、多くの場合は、阿弥陀如来は彫刻の来迎印像を人が担ぐ。二十五菩薩は、衣装を着けた人が菩薩の仮面を着け、そして、極楽から現世、現世から極楽へと行って帰る姿を行道して舞台の上で演ずる。そういうのが迎講です。そういう迎講のときの本尊としてつくられたのが、来迎印の阿弥陀如来像だと言われております。

ただ、もちろん阿弥陀如来を祀るお堂から、多くの場合は、舞台をつくって、その上を現世（穢土）へ行って帰るといふようなことが演ぜられるわけです。その行道するさいの像と、お堂（阿弥陀堂）の中に祀られる阿弥陀如来像は、それぞれ別なので、そのお堂の中に祀られるのが迎講の本尊の阿弥陀如来像ということになります。ある

いは迎講は光講とも呼ばれますが、そういったものとして考えられているわけです。

これに関しては、やはり発生がよく分からない。平安時代のある程度時代が下ったところ、初期から中期、藤原時代の初めか、その前くらいのところからつくられ始め、典拠が分からないとされています。これに関して、実は院政期の信証の口決というものを『白宝口抄』にのせていますけれども、これは阿弥陀如来の定印を引き放った形とされます。要するに阿弥陀如来の定印、この形の定印を左右に引き放って、持ってくる。右手施無畏印、左手与願印は、お釈迦様においては説法印です。阿弥陀如来は転法輪印、あるいは説法印の姿につくるのだということ、さまざまな儀軌、先ほどの『陀羅尼集経』ほかのものにも出てまいります。そうすると、阿弥陀如来の定印を左右に引き放って、説法印にしたのが来迎印だという考え方。そういう説明は的を得たものである可能性が考えられるだろう。そういうふうに見ていきますと、やはり来迎印も密教由来である。

一般の転法輪印ですと、親指と人さし指というよりは、先ほども言いましたように、親指と薬指をくつつける方が一般的ですので、親指と人さし指をくつつける形ということ自体が密教由来である可能性は高いと考えます。

そういった像で有名なのが、南山城、浄瑠璃寺の九体阿弥陀というものです。これは九体阿弥陀ですから、九品往生の阿弥陀如来なのですが、不思議なことに、一番中央の一回り大きい阿弥陀如来が来迎印の阿弥陀でございませぬ。ほかの8体は定印の阿弥陀如来。定印の阿弥陀如来8体が、来迎印の阿弥陀の横に4体ずつ並んでいる。そういうのが浄瑠璃寺の九体阿弥陀です。

実は九体阿弥陀というのは、法成寺という今はなくなってしまったお寺の阿弥陀堂でもつくられたと言いますが、おそらく法成寺も同じような形であっただろうと推測されます。実はこの浄瑠璃寺というお寺、興福寺の一乗院というお寺の別所ですが、この当時、一乗院は興福寺の中で法相宗の長者（興福寺別当）になる院家でございました。

その一乗院の院主は、この浄瑠璃寺で真言密教の修行をした。あるいは（同じ南山城に在る）内山永久寺の方は、一乗院と並ぶ大乘院の別所でした。

一乗院ですと、一乗院は大覚寺を兼帯している。真言宗のお寺である大覚寺の座主を兼ねているのが一乗院で、大乘院というのは、興福寺の中で一乗院と並んで興福寺の別当になる院家ですけれども、内山山永久寺という別所では、真言僧として醍醐寺金剛王院流という法流を継いでいます。そういう興福寺のお坊さんですけれども、一乗院にしても大乘院にしても、その一方で真言密教の修行者でもあるというのが、興福寺の実際のところでした。そういう興福寺の別所で作られた九体阿弥陀。やはりそこには周りの8体の定印の阿弥陀如来像ということを含めて、密教の造像ということが考えられる。

実はこの8体の定印の阿弥陀如来というのは、空海さんの阿弥陀如来の修法（次第）の中に、その自身観という、自分自身を観想するという観想があつて、ここでは八葉蓮華、回りの八葉に8体の阿弥陀さんがいて、真ん中に観自在菩薩がいる。そういうものを観想する。それは、真ん中の観自在菩薩が自分自身、修行者の段階で、周りの8体の阿弥陀如来が、悟りの世界ということ。その中央の観自在菩薩が来迎印に変わると、この九体の阿弥陀如来像になる。そういったものが典拠ではないのか。これは具体的な証拠はありませんし、はっきりとしたことは分かりません。けれども、そういったことがさまざま考えられる九体阿弥陀というものがあります。

最後に一言、資料の15ページの上の方に挙げています。これが、禅林寺の見返り阿弥陀です。光背の上部に載せてある。写真を拡大しました。宝冠をかぶった定印の像が、この光背の上部に載っています。宝冠をかぶるということは、普通ですと菩薩ですが、仏の、如来の化仏に菩薩が付くのはあり得ませんので、これは仏です。そうすると、宝冠をかぶる仏というと、宝冠仏。宝冠の釈迦、宝冠の阿弥陀のほかには、大日如来です。宝冠の釈迦が阿弥

陀如来の化仏に付くことは考えられませんので、宝冠の阿弥陀か大日如来。これまで見てきたように、わざわざ化仏として付けるのであれば、宝冠の大日如来と考えるのが一番妥当ではないか。これだけの写真ですと細かいところが分かりませんから何とも言えません。

こういうように大日・阿弥陀一体の阿弥陀如来というものを本尊として、密教の阿弥陀如来の浄土、あるいはさらに言えば、密教浄土教の立場で言えば、他方世界の阿弥陀如来の極楽浄土、西方の極楽浄土も、実は大日如来の密厳浄土の一部ということになる。密厳浄土は十方諸仏の一切の浄土をその内に含んでいるのが、大日の浄土ということですから。大日・阿弥陀一体の阿弥陀如来の浄土が、そのまま大日如来の密厳浄土でもある。そこへ往生をする。一般的ところで言えば、そういう西方の極楽浄土へ往生しながら、さらには未来、兜率天から弥勒菩薩が下生してくる、その竜華三会に会うというような信仰も含めて、そういう密教の信仰とつながりながらの、阿弥陀如来像の問題になっていくのだろうと考えます。

本来からすれば、密教と浄土教の造像ということでは、阿弥陀如来像だけではなくて、弥勒菩薩あるいは兜率天の問題などもあります。兜率曼荼羅の中には、弥勒菩薩の来迎図などというものもござります。そういった中には、弘法大師空海がその来迎図と一緒に描かれるといったような問題もあって、そういう密教の浄土教の問題、ほかの問題もあります。

また、今日は資料を用意はしましたけれども、お話しできなかった、密教独特の宝冠の阿弥陀如来像の問題、あとに載せてあります。そういったものもあとでご覧いただければと思います。

時間になりましたので、今日の密教浄土教と阿弥陀如来像のお話、このあたりでいったん終わらせていただこうと思います。